

論文要旨

学位論文題目 インターネットを活用した国際交流による偏見低減効果

氏名 松尾由美

対面と比較し、インターネットを介した国際交流は実施しやすいという利点がある。しかし、これまでインターネットを介した国際交流は散発的に実践は行われているものの、偏見低減効果を統計的に検討した研究はまだ数少なく、知見の蓄積が必要であった。そこで、本研究はインターネットを介した国際交流の実践を行い、その有効性を統計的に検討することを第一の目的とした。特に、これまでの先行研究で多く行われてきた協力や自己開示が、偏見低減に有効であるのかを統計的に検討しようとした。加えて、先行研究で扱われてきた交流は、授業の中で行われることが多く、教員や学校が交流を肯定的に評価する「制度的支持」のある交流であった。そこで制度的支持のない自然場面におけるインターネット上での外国人利用者との交流が偏見低減に有効であるのかを検討することを第二の目的とした。

これらの目的を達成するために、研究1では仮想空間内で言葉を用いない協力の有効性、研究2では翻訳チャットを介した自己開示の有効性を実験により検討した。その結果、研究1では3次元仮想空間内で協力を体験する交流に参加した群は、参加しなかった群と比べて、交流相手国民に対する潜在的態度(潜在連合テスト)と顕在的態度の一部の測度(感情温度計)で偏見低減効果が見られることが示された。研究2では翻訳チャットを介して自己開示を行う国際交流への参加前後で、交流相手国民に対する潜在的態度、顕在的態度(感情温度計・好意イメージ・接近傾向)が改善することが示された。さらに、自然場面での効果を検討するために、研究3では協力を体験しやすいMMORPG(Massively Multiplayer Online Role-Playing Game; 大規模多人数同時参加型オンラインRPG)プレイヤーを対象に仮想空間内での外国人プレイヤーとの交流、研究4では自己開示を体験しやすいSNSの利用者を対象にSNS(Social Networking Services)内での外国人利用者との交流による偏見低減効果について、縦断調査により検討した。その結果、研究3では仮想空間内での交流、とりわけ協力的な交流による偏見低減効果は見られなかった。研究4では外国人利用者とSNS内で直接接触することが外国人全般に対するイメージを有意に高めることが示された。加えて、SNS内に外国人の友達を持つSNS内の日本人の友達の存在を知ることや、その交流場面を目撃する間接接触が、外国人全般に対するイメージを高めることが示された。

本研究で得られた知見を概括し、第一の目的であるインターネットを介した国際交流が偏見低減に有効であるのかを検討した。研究1では、潜在的態度と顕在的態度の一部の測度(感情温度計)のみでしか偏見低減効果が見られなかった一方で、研究2では様々な態度指標(潜在連合テスト、感情温度計、外国人イメージ、接近傾向)において効果が見られた。また、研究3では協力が偏見低減に及ぼす有意な効果は見られなかった一方で、研究4ではSNS内で外国人利用者との直接接触経験が多いほど外国人全般に対する好意が高まることが示された。したがって、制度的支持のある場面でも、自然場面においても、協力よりも自己開示を行う交流の方が、偏見低減に有効である可能性が示唆された。

第二の目的である自然場面におけるインターネット上での国際交流の偏見低減効果を検討した。その結果、実験室場面で交流が行われた研究1と研究2では偏見低減効果が見られたものの、自然場面での交流を検討した研究3では偏見低減効果が見られなかった。しかし、研究4ではSNSでの交流による偏見低減効果が見られた。研究4も研究3と同じく自然場面における交流だったが、本研究で扱ったSNSのように自動翻訳機能を装備するなど、国を超えて利用者がつながることを前提とするシステムは、利用者に暗黙のうちに、国際交流を支持するメッセージを伝える可能性が考えられる。

最後に、インターネットを介した国際交流の段階モデルを提案した。まず、第一段階として、交流を始める前に、制度的支持があることを明示したり、間接接触経験をさせる。このことにより、他の内集団成員も交流を肯定的なものであると評価していることが交流参加者に伝わり、交流の際に起こる集団間不安の緩和を促すことが期待できる。次の段階として、自己開示を介した交流を実施する。この際、個人的な情報を交換し、交流相手への友情関係を深める交流の後で、互いの文化や国について理解を深める国籍や民族を意識させた交流に移行する。このような経験により、交流相手に対する友情や好意を抱くだけでなく、このような肯定的な態度が交流相手国民全体に般化する可能性が期待できる。最後の段階として、互いに共通の目標を達成するために協力が不可欠な課題を経験させる。研究1で得られた知見において、よく知らない相手といきなり協力させることは、必ずしも交流相手に対する好意や交流相手国民に対する肯定的な態度を高めないことが示唆された。互いのことをよく知った上で協力を経験することで、このような問題を解決できることが期待される。